人権ワンポイント提言Ⅲ

ケータイ・ネットと子どもたちの人権　☆彡

●「学校裏サイト」「プロフ」(ネット上の自己紹介)「ネットいじめ」等が最近注目され、ケータイ(携帯電話)をめぐる子どもたちの危険な状況が指摘されています。「子どもの安全のため・友だちから孤立しないため」に与えたはずのケータイが、子どもを危険にさらし、時には子どもの人間関係を崩したり、加害者にもさせてしまう場合があります。子どもたちのケータイ依存やケータイ・ネットの落とし穴、人権教育課題について考えてみましょう。

■子どもたちにとってケータイは、単なる電話機ではなく、むしろメールやサイト閲覧ができるコンピュータであり、写真・映像・音楽なども楽しめるマルチメディアのモバイルツールです。インターネットは、さまざまな情報に接し、いろいろな人々につながることで、豊かな世界を築く可能性ももちますが、人権を侵害する情報や有害情報へのアクセス、悪意の情報発信も簡単にできてしまいます。1999 年以降、ケータイからインターネット接続ができるようになったわが国では、大きな可能性と、深刻な事態が同時に進行しているのです。

◆不安な時、自信が持てない時、自分を認めて欲しいと、人は願います。そのために人は努力もするし、不当な差別と闘おうともします。成長過程の子どもたちは、自分に自信が持てるように日々努力し、自分を認めようとしないものと闘おうとしているといえます。子どもたちにとって、メール受信は「自分を認めてくれている」という癒しであり、メール送信は「自分を見捨てないでね」という脅迫的な儀礼として機能している面があります。しかし、文字列によるコミュニケーションには誤解や拡大解釈が起きやすく、返信遅れや絵文字一つで人間関係にひびが入ることがあります。悪意の拡散も容易で、一晩で悪者に祭り上げられることもあります。濃密な同調圧力で維持されるメル友つながりは、極めてもろく、互いの違いを認め合う関係とは言えません。

▲中学生の２割・高校生の３割が、自分の個人サイト(ホームページ)を持っており、頻繁に更新している子どもたちも少なくありません。個人情報を自ら書き込む「プロフ」を持っている子どもも多くいます。友だちのホームページやプロフに設置された日記や掲示板などの記述を互いに確認しあうために、日々かなりの時間を使っている子どももいます。「相手の機嫌をそこねてはならない」という同調圧力と、「大人や教員、見られたらまずい友だちは見ていない」という思い込みから、同級生や教員などを「盛り上がるネタ」として中傷することがしばしば起こります。子どもたちは案外ネットでつながっています。傷ついた子どもは、書かれた事実だけでなく、「多くの友だちがそれを閲覧しているだろう」「また何か書かれるかもしれない」という不安や恐怖で、ケータイを手にする友だちを見ただけで体が震える子どももいるわけです。これが一般の電子掲示板、とりわけ「学校裏サイト」になると、匿名を隠れみのにして、さらに悪意を込めた書き込みがなされることもあります。

★大人は何をすべきでしょうか。有害サイトのフィルタリング(閲覧制限)も必要ですが、万能ではありません。技術的な対応ですませてもいけません。ケータイもまた道具であり、使う側の意識が問われています。「**人として、人とどう向きあうか**」を、子どもとしっかりと向きあって話し合い、家庭や教室などで**ルールづくり**をすることからはじめましょう。インターネットやケータイを使いこなせなくても、「人との向き合い方」を身をもって示すことができる大人、人権を尊重する大人であることが、私たちに求められています。　(文責:黒田)